進路室の窓から No.9 2023/9/21

私立大の入試の仕組みと、心構え

今回は、国公立大・私立大が、どうして区別されるのか、さらに私立大一般入試への心構えの確認をしてみます。3年生にとっては当たり前なことですが、案外わかっていない人もいるかもしれません。また、2年生、1年生のみなさんも、大学入試の仕組みがどうなっているのか今のうちにきちんと把握しておくとよいかなと思います。

読むのが面倒な人、大体わかってるよ、という人は、裏面の**<結論>**だけ読んでくれても大丈夫です。

<入試制度の仕組みについて>

そもそも、国公立大と私立大は制度上の区分であって、レベルとか就職とかそういう話ではありません。まず、明確な違いは授業料（＋諸費用）です。特に理系であれば数百万～千万円レベルでの違いがあります。ですので、同程度の国公立大と私立大に合格した多くの受験生は国公立大に進学することが多いです。もちろん、国公立に合格したけど私立大に進学するという人もいます。また、受験生の立場からみると、入試科目数の問題も大きいとは思いますが、今回は注目しません。

今回、確認しておきたいのが、入試制度上の違いです。仕組みが違うので、説明が別々になるのです。

国公立大の一般入試は前期・中期・後期の3回の日程があり、それぞれ1大学しか受験できません。多くの国公立大は前期・後期の2回の日程を設定しますが、旧帝大では前期試験1回のみというところもあります。従って、一般的には**国公立大の一般入試を受ける機会は 1 回～2回しかない**、ということになります。ちなみに合格発表は3月に入ってからになるので、国公立大の合格発表は卒業式の後になることがほとんどです。

これに対して、私立大の一般入試は1月～3月にかけて、複数回、様々な方式で行われるものが多く、日程が許す限り何校でも受験できます。また、共通テストのみ利用であれば、受験会場で試験を受けなくても受験できます。したがって、私立大は複数校を複数回受験できます。結果、同じ大学の同じ学部に3つ不合格して2つ合格というような例はたくさんあります。ちなみに、多くの場合、私立大の合格発表は国公立大の合格発表の前に行われることが多いです。

以上から、**国公立大は限られた受験回数、私立大は多くの受験方法・機会がある**、というのが違いになります。

<定員と合格者数と入学者数>

さて、ここで最初の話に戻るわけですが、私立大と国公立大の両方に合格し、国公立大に入学されてしまうと、私立大側は困ります。もちろん、私立大に複数合格した場合も、もちろん、受験生は1つの大学にしか進学しませんね。データをみると、**私立大合格者の約 65%程度が入学していません**。（延べ合格者 1,494,758 人、入学者500,599人）

そこで、ちょっと自分が**私立大の経営者の立場**になって考えましょう。大学の**収入 I** は

I＝「入学者数」×（「入学金」＋「授業料」）

ですね。合格しても入学してくれない受験生がいることに対してどんな対策がとれるでしょうか？

まず、1つは、国公立大（や、他の私立大）の**合格発表の前に、入学手続き**をしてもらう、ということが考えられます。**入学辞退をされても「入学金」を返金しない**という仕組みにすれば、大学としては収入になります。もちろん、受験生側としては行かない大学の入学金を払うのは納得できませんが、そういう仕組みが多いです。

そしてもう一つが、あらかじめ入学辞退者が出ることを想定して、**多めに合格者を出しておく**、ということです。例えば、定員100名の学部が100名の合格者を出したとしても、90名が他の大学に入学したら、10名しか入学しません。ですので、入学辞退者が95名出るという予想を立てて、195 名を合格者とする、といった方法をとります。いや、ほんとこういう予測計算をしている各大学の入試担当の方々は尊敬しますね。ただ、こういうやり方をしても、場合によっては 195 名合格したのに、125 名の辞退者が出た、ということもあるわけです。すると、70名しか入学してくれず、30 名分定員不足になります。そこで、3月に入って補欠合格や、追加募集をする大学があるのです。ちなみに、各大学は、定員ピタリに近くないと（多くてもダメ）、文科省からの補助金等が削られるので、定数確保に必死です。ちなみに国公立大でも入学辞退者の数はそれほど多くはないものの、やはり補欠合格・追加募集があり得るので要チェックです。

＜結論＞

さて、ここまでの説明を踏まえて、特に私立大学の受験に対して考えておいてほしいことを挙げておきます。

①【最重要】私立大学の入試日程については**入試日**だけでなく、**合格発表日**、**入学手続き締切日**も必ずチェックしておきましょう。特に**志望順位**と**手続き締切日**の関係は重要です。より行きたい大学の合格発表より前に、いわゆる滑り止め大学の入学手続き締切があると、手続きをするかどうか迷うことがあります。

> **具体例：**
>
> P 大学（行きたい：模試で A 判定）の合格発表より前に、合格済みの Q 大学（あまり行きたくはない）の入学手続き締切があった。多分 P 大学に合格しているだろう、と期待して、入学金を払いたくないばかりに放っておいたら、P 大学は不合格だった。
>
> **反省ポイント：**
>
> ・あまり行きたくない（というより、合格しても入学する気がない）のであれば、そもそも受験しなければよかった。
>
> ・どうしても浪人したくないのであれば、合格した Q 大学の入学手続きをしておくべきだった。
>
> ・そもそも、事前にこういう状態になることを、カレンダーを見て確認しておけば、慌てることにならなかった。

②【模試のとらえ方】模試の結果を見て、私立大学の**「志望者 x 人の中の n 位です」**という n 位が、入学定員よりも大きくても、入試方式によってはそんなに凹むことはないです。多くの場合、定員数よりも多く合格者が出るからです。実際に、昨年度**その大学がその入試方式で何名の「合格者」を出したか**については、各大学のホームページに掲載されている場合が多いので、チェックしてみるとよいです。だからといって安心というわけではありませんね。本番では模試を受けていない人も出願します。油断せず**あとはさらに頑張りましょう。**

③【出願作戦】大学によっては、例えば共通テスト利用**定員10名**、となっていても、**100名以上合格者**を出すところがあります（なぜなら、共通テストで高得点をとっているような受験生は、もっと上の大学に合格してしまうので、結局入学してくれないだろうという大学側の判断）。もちろん、人気の高い（＝入学辞退者が少ない）大学ではそれほど甘い合格者数にはなりませんが、ハイレベルの大学になると、上位層は旧帝大に行ってしまうので、補欠合格を出してくれるところもあります（あくまでも、個人的な感覚ですが、補欠順位を示してくれる某大学などは、かなりの後ろの順番でも、**補欠合格でそのまま繰り上げ合格になるパターン**が毎年あるように感じてます）。ですので、**定員が少ないから、とためらわず、情報を集めてみてチャレンジ出願するのもありだ**、ということです。

④【補欠合格・追加募集】最近は減りましたが、3月後半に補欠合格の連絡を電話でしてくる大学があります。電話連絡がつかなくて次の人に行く、ということもあるので注意が必要です。また、3月下旬ともなると、進学先・住むところが決定してから補欠合格の連絡が来ることも多いです。もし、そうなった場合どうするかも、ある程度決めておいた方がいいかもしれません。

＜まとめ＞

ちょっと1、2年生にとっては少し細かい話だったかもしれませんが、単に学力だけでなく、入試の仕組みや日程の把握も大学受験には必要になってきます。第一志望が叶わなかった時、浪人してでも目指すのか、第二、第三を考えるのか、そして、第二、第三～の受験をどうするのか、ある程度の作戦は立てておかなければなりません。その際、なるべく精神的にも（メンタルは大事です）、肉体的にも（受験会場のはしごは疲れます）、また、金銭的にも（受験料・交通費・入学金等々）、負担の無いような計画を立ててもらうために、今回はちょっと回りくどい説明をしてみました。

図書館の赤本が充実してきました。

昨年度版の赤本が夏を過ぎて増えてきました。最近図書室に行っていない人は見てみてください。また、「〇〇大学の赤本はありませんか」という問い合わせが増えてきています。残念ながら、購入していない大学も多いです。特に第一志望の大学であれば、自分で購入する（書き込みや付箋もできますし）ということも考えてみてください。

また、進路資料室には、大学のパンフレットも少しずつ入ってきています。入って右手の引き出しも活用してください。